

去イヌル 文永十一年二月に佐土の国より召し返されて、同じき四月の八日に平金吾対面して有し時、理不尽の御勘氣の由委細に申含ぬ。又恨らくは此国すでに他国に破られん事のあさましきよと歎申せしかば、金吾が云、何の比か大蒙古は寄せ候べきと問しかば、経文には分明に年月を指たる事はなけれども、天の御氣色を拝見し奉に、以の外に此国を睨させ給か。今年は一定寄ぬと覺ふ。若寄するならば、一人も面を向者あるべからず。此又天の責め也。日蓮をばわどのばら(和殿原)が用ぬ者なれば力及ばず。穴賢々々、真言師等に調伏行せ給べからず。若行するほどならば、いよいよ悪かるべき由申付て、さて帰てありしに、上下共に先の如く用ざりげに有上、本より存知せり、国恩を報ぜんがために三度までは諫曉すべし。用ずば山林に身を隠さんとおもひし也。又上古の本文にも、三度のいさめ用ずば去といふ。本文にまかせて且く山中に罷入ぬ。其上は国主の用給はざらん其已下に法門申て何かせん。申たりとも国もたすかるまじ。人も又仏になるべしとおぼへず。

(建治三年六月)